

第1章

総

論

1	第3期長中期計画の策定方針	1
2	スカウト運動のミッション	2
3	計画策定にあたっての基本認識	3
4	2032 ビジョンー2032年度の日本のスカウティングのあるべき姿	6
5	今後の施策の方向性	7

1

第3期中長期計画の策定方針

第3期中長期計画の名称を「新たな100年に向けての挑戦―地域と共に歩み、社会課題の解決に貢献するスカウティングを目指して―」とし、スカウティングの普遍的ミッションを「スカウト運動の使命声明」に求め、さらに「スカウト教育法」が8つの要素に改定された背景を強く意識し、本計画を策定することとしました。

また創始者ベーデン-パウエルは、「君たちに別れの言葉をおくりたい」と述べ遺言ともいべきいわゆる最後のメッセージを残しています。スカウティングの本質的価値は、ここから読み取れるように青少年に「幸福な人生を歩んでもらう」ことにあります。時代や国、文化あるいは人によって、「幸福」の価値観が変わることがあっても、「幸福な人生を歩んでもらう」というスカウティングの本質的価値は普遍であるといえます。

この運動に関わる全ての人々が、この運動に関わった青少年は必ず幸福な人生を歩むことができる、そして、この運動に関わる人が増えれば必ずこの世界はより良くなるという確固たる信念を共有することが大切であり、そのために今後10年間の日本のスカウティングの進むべき方向性を示したものが、本計画となります。

【創始者ベーデン-パウエル(B-P)最後のメッセージ】

「スカウティングフォアボーイズ」(ボーイスカウト日本連盟発行)より抜粋

スカウト諸君

「ピーターパン」の劇を見たことのある人なら、海賊の首領が死ぬ時には、最後の演説をするひまはないにちがいないと思って、あらかじめその演説をするのを、覚えているであろう。私もそれと同じで、今すぐ死ぬわけではないが、その日は近いと思うので、君たちに別れの言葉をおくりたい。

これは、君たちへの私の最後の言葉になるのだから、よくかみしめて、読んでくれたまえ。

私は、非常に幸せな生涯を送った。それだから、君たち一人一人にも、同じように幸福な人生を、歩んでもらいたいと願っている。

神は、私たちを、幸福に暮らし楽しむようにと、このすばらしい世界に送ってくださったのだと、私は信じている。金持ちになっても、社会的に成功しても、わがままができて、それによって幸福にはなれない。幸福への第一歩は、少年のうちに、健康で強い体をつくっておくことである。そうしておけば大人になった時、世の中の役に立つ人になって、人生を楽しむことができる。

自然研究をすると、神が君たちのために、この世界を、美しいものやすばらしいものに満ち満ちた、楽しいところにおつくりになったことが、よくわかる。現在与えられているものに満足し、それをできるだけ生かしたまえ。ものごとを悲観的に見ないで、なにごとにも希望を持ってあたりたまえ。

しかし、幸福を得るほんとうの道は、ほかの人に幸福を分け与えることにある。この世の中を、君が受け継いだ時より、少しでもよくするように努力し、あとの人に残すことができたなら、死ぬ時が来ても、とにかく自分は一生を無駄に過さず、最善をつくしたのだという満足感をもって、幸福に死ぬことができる。幸福に生き幸福に死ぬために、この考えにしたがって、「そなえよつねに」を忘れず、大人になっても、いつもスカウトのちかいとおきてを、堅く守りたまえ。神よ、それをしようとする君たちを、お守りください。

2

スカウト運動のミッション

第35回世界スカウト会議（1999年南アフリカ・ダーバンで開催）において、「スカウト運動の使命声明」が採択されました。これは、世界スカウト機構規約の目的・原理・方法をより具体的に推進することと、スカウト運動が社会で果たすべき任務を確認するもので、その全文は次のとおりです。

なお、現在の世界スカウト機構のミッションもほぼ同一内容となっています。

スカウト運動の使命声明

スカウティングの使命は、スカウトの「ちかい」と「おきて」に基づいた価値観を通して人々が個人としての資質を発揮し、社会において積極的な役割を果たすことができる、よりよき世界を築くことに役立つよう、青少年の教育に貢献することにあります。

この使命は

- ・青少年をその成長段階にある期間を通して、ノンフォーマル教育の課程に関与させること。
- ・青少年が自己を信頼し、協力的で、責任感があり、明確な態度をもった人間として成長するにあたって、一人ひとりを重要な役割を持つ者に育てるための特有の方法を用いること。
- ・スカウトの「ちかい」と「おきて」に示されている、精神的、社会的、かつ個人的な原則に基づいた価値体系を確立するよう青少年を支援すること。

によって達成されます。

本文にある「主体的に関わる者に育つようになる固有の方法」とは「スカウト教育法」を指します。第41回世界スカウト会議（2017年アゼルバイジャン・バグーで開催）において、これまで7つとされてきた「スカウト教育法」に、「社会との協同」が追加され、8つの要素となりました。Azerbaijan2017 DOCUMENT 8には次のように説明されています。

スカウトたちは「社会との関わり」をとおして、様々な人々と協働し多様性を学びます。それゆえ、社会と向き合う、または社会の中に入ることで、スカウトたちは文化の違いを乗り越えて互いを理解する、また世代間に横たわる問題をしっかり認識する、そして様々な形で社会とより深くかかわる、といった力を身につけることができます。

社会との協同によって、人々は「より良い地域社会を目指す」という共通の目標のために結集し、より強固な絆を築くことができます。また、多くの人々にスカウティングの価値や目的を思い起こさせスカウティングの原点に思いを至らせることとなります。地域社会と関わりなくスカウトがたった一人でより良い世の中を築くことなどできません。どのような規模であれスカウトが習得したことの積み重ねによってそれは築かれるのです。奉仕とは、単に他人に対して行うということではなく協同することなのです。すなわち他の人々とともに一緒に行うことなのです。「社会との協同」で大事なことはスカウトがより良い世の中を築くよう導いてあげることです。一人ひとりのスカウトが行動する市民としての自覚と責任を持って社会でどのような役割を果たすことができるのか自分自身で理解する、それが重要なことです。

ただ、ここで考えておきたいことは、スカウティングの本質的価値が「青少年に幸福な人生を歩んでもらう」ことにある以上、本来、スカウティングは社会と関わりことでしか価値を持ち得ないはずですが、にもかかわらず、あえて「社会との協同」と表現しなければならないほど社会、地域や生活そのものからスカウティングが乖離した存在になっている、あるいは協同や共創を社会から強く要請されているのではないかということです。

3

計画策定にあたっての基本認識

第3期中長期計画では、継続した課題を改めて整理するとともに、「社会を取り巻く急激な環境変化」を含め、これまでに生じた新たな課題を分析した上で、それに対応する取組みを計画的に推進します。

第42回世界スカウト会議（2021年新型コロナウイルス感染症の影響で初のオンライン開催）では「アクティブな地球市民として世界の架け橋になる（Bridging the world as active global citizens）」としてワークショップが開催されました。このワークショップでは、過去3年間の主要テーマでもあった membership growth（会員数の増加）、environmental action（環境活動）、diversity and inclusion（多様性と受容）、child and youth protection（児童と青少年の保護）、Messengers of Peace（「メッセンジャー・オブ・ピース」）、Scouts for SDGs and Earth Tribe（「スカウト・フォー・SDGs」と「アース・トライブ」）にこの運動の若者が中心となって貢献すること焦点が当てられました。

日本社会の現状や日本のスカウティングの実情に応じて、これらの課題に呼応していきます。

（1）社会を取り巻く急激な環境変化

①新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の影響は、社会・経済はもちろんのこと子どもの日常生活にも及んでいます。感染症の影響による社会変容を踏まえた、ウィズコロナ・ポストコロナの時代を見据えた取組みが新たに求められています。これらの状況を踏まえて、新たなキャンピングスタンダードの確立など必要な取組みをスピード感を持って進める必要があります。

②社会のデジタル化の進展

新型コロナウイルス感染症の影響により、テレワークやオンライン会議の利用拡大など社会のデジタル化に向けた取組みが急速に進んでいます、スカウティングにおいても、デジタル化に向けた取組みを着実に進める必要があります。

③急激な地球環境の変化

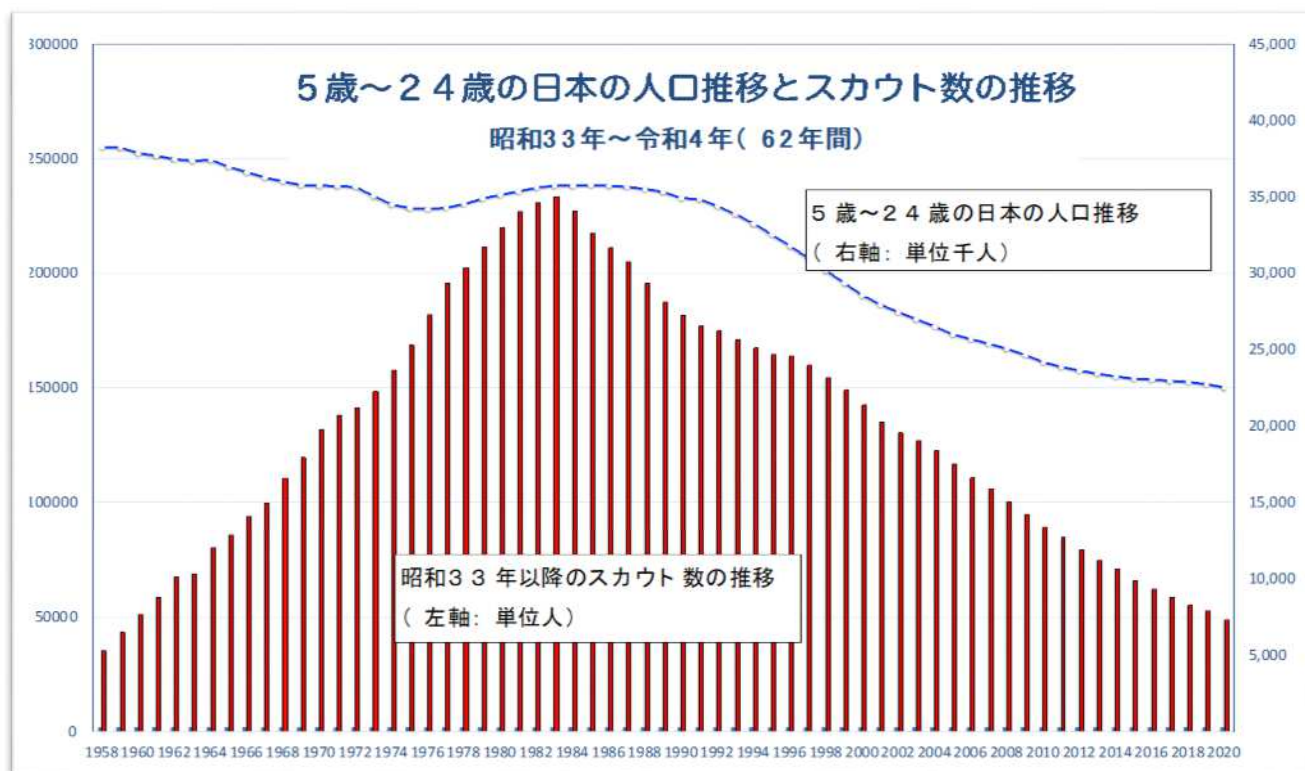
地球温暖化による気候変動、「マイクロプラスチック問題」に代表される海洋汚染、地震対策に加え、激甚化・頻発化する風水害・森林破壊など大規模自然災害のリスク、生物多様性の破壊などへの対応が大きな社会課題となっています。これらの課題にスカウティングがどう向き合うか早急に検討を進める必要があります。

④日本の総人口・年少人口とスカウト数の減少

2017（平成29）年に国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の将来推計人口」によれば、総人口は既に減少局面に入っている状況にあり、2020（令和2）年から2065（令和47）年にかけて、約3,800万人（約30%）減少する見込みとなっています。

令和2年版厚生労働白書一本編図表「図表1-1-7 出生数、合計特殊出生率の推移」によると、出生数がピークであった1973（昭和48）年の209万人から、54年後の2019年（令和元年）の87万人まで123万人（58%減）の減少となりました。その結果、年少（0～14歳）人口も同期間1973（昭和48）年の2,645万人から2019（令和元年）年の1,512万人まで1,133万人（43%減）の減少となっています。年少人口はその後減少が続き、前国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口：年少人口」の出生中位・死亡中位推計の結果によると、本計画の最終年である2032（令和14）年には1,286万人と推計され、226万人減少（13年間で15%減）するとしています（出生低位・死亡高位の場合の推計値は2032年で1,118万人）。

5年前、2017（平成29）年に出された前出の同推計人口によれば、2022（令和4）年の出生数は85万人とされていますが、厚生労働省が2022（令和4）年12月20日に発表した人口動態統計では昨年2021（令和3）年にすでに84万人と確定されており、また翌年2022（令和4）年には80万人に減少する（昨年度の減少率によって今年11月、12月を推計）可能性があります。この値は2017年の推計では2029年の値に近く、現状でもすでに想定より6年以上早いペースで少子化が進んでいることとなります。

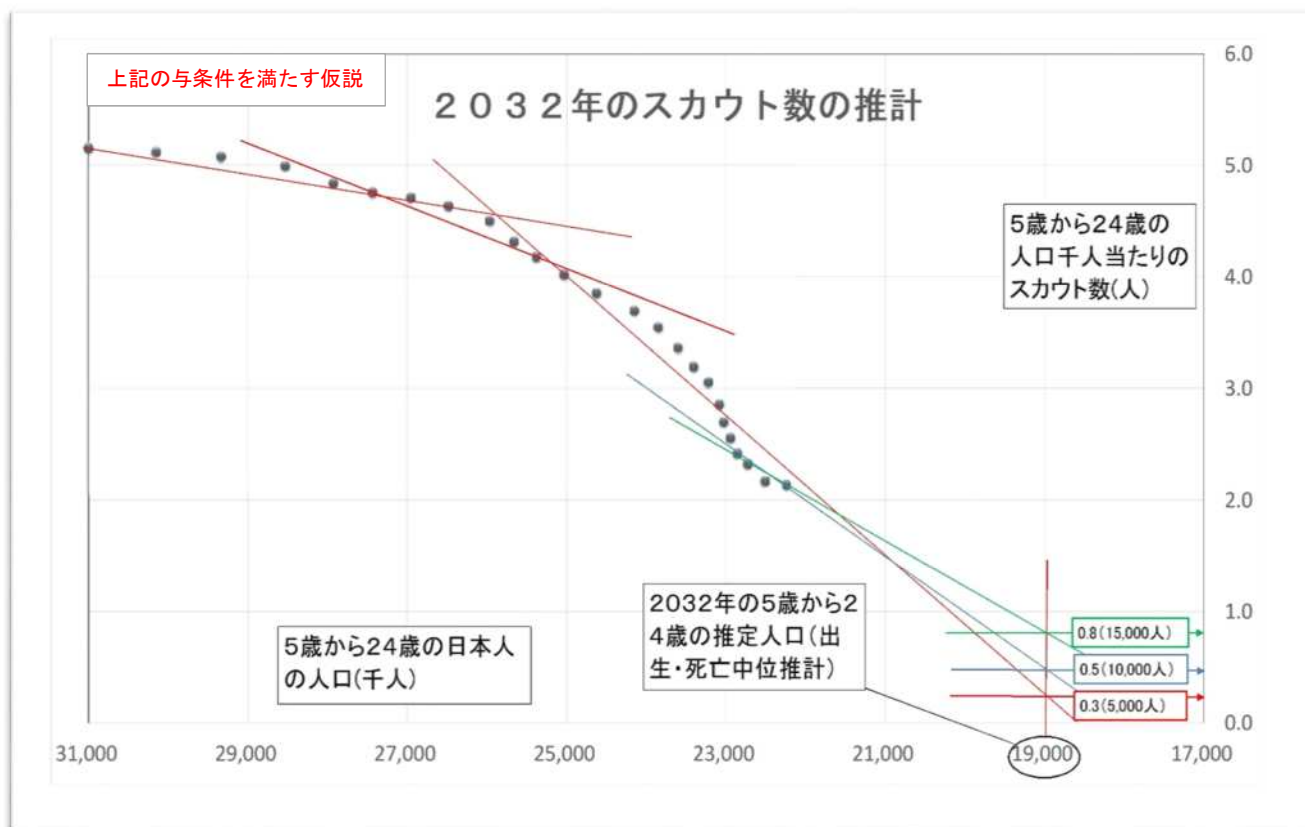


⑤ 2023年のスカウト数の推計

1958（昭和33）年～2020（令和2）年のスカウト数のグラフと、同年の5歳～24歳（スカウト年代）の日本の人口推移を描いたものが上図です。図のバランスは、昭和58（1983）年ピークの点を合致させてあります。1983（昭和58）年にスカウト数が233,473人でピークを迎えましたが、その当時のスカウト年代の日本の人口は3,572万人で、これ以降、2020（令和2）年の2,252万人に向かって緩やかなS字カーブを描いて減少しています。なお、2020（令和2）年のスカウト数は48,934人でした。

この図をよく見ると、スカウト年代の日本の人口減少に比べて、スカウト数の減少割合はさらに勾配が強く減少し、しかも年々両者の乖離は大きくなっていることが分かります。そこでスカウト年代（5歳～24歳）の日本の人口千人当たりのスカウト数を年ごとに計算すると、ピークは1983（昭和58）年の6.537人で、以後この値は年々減少を続け、2000（平成12）年には5.0人を割り、2009（平成21）年には4.0人を、また2015（平成27）年には3.0人を割って2020（令和2）年には2.17人にまで減少してきました。この減少は、日本のスカウト年代の人口減少より、スカウト数の減少の方が大きいことを意味しています。これをグラフに描いた図が下の図です。図は横軸に5歳から24歳の日本の人口を、縦軸は5歳から24歳の人口千人当たりのスカウトの数を表しています。図の各点は1997（平成9）年以降2020（令和2）年までの実数です。

2017（平成29）年に国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の将来推計人口」によれば、2032（令和14）年のスカウト年代（5歳～24歳）の日本の推計人口は1,912万人です。おおよその減少勾配を赤線で表しましたが、勾配は年々大きくなっていることが分かります。この赤線を2032（令和14）年の1,912万人の所まで伸ばすとその時の縦軸の値は0.3人程度と読み取れます。すなわち日本の5歳から24歳の人口千人当たりスカウト数は0.3人、つまり2032年のスカウト数は約5,000人であることを示しています。2018（平成30）年以降若干減少カーブが緩やかに変化したことを考慮にいった線が青線で、これだと縦軸の値は0.5程度、スカウト数に換算すると約10,000人、ここ数年間のスカウト数の回復基調を見込んだ線が緑線で、縦軸の値は0.8程度、スカウト数に換算すると約15,000人と見込まれます。



4

2032 ビジョンー2032 年度の日本のスカウティングのあるべき姿

これらを踏まえて、第3期中長期計画最終年度である2032年度の日本のスカウティングのあるべき姿を次のように位置付け、このビジョンを達成するために「4つの基本施策」ー「10の施策」ー「34の重点事業」を定めました。

様々な団体と繋がっている団・地区・県連盟・日本連盟（以下、全ての組織という）が国際社会や地域から必要とされる存在となっており、「より良い世界をつくる」ことに貢献する青少年を一人でも多く育てている。

また、全ての組織で、その担い手として様々な人材が活躍している。

これまでは、連携・協力関係にある相手方として行政や青少年育成団体、野外活動団体等に限られる傾向にありました。しかし、今後はこれらの相手方はもちろんのこと町内会・自治会、消防団などの**地域の団体**、平和、人権、国際、子どもの貧困、脱炭素、防災・減災などの**社会課題の解決に取り組む多くの団体**や**様々な企業**と連携・相互協力関係の構築を進め、全ての組織が、**地域から頼りにされる**ことを目指します。

スカウト教育については、発達段階に応じた自発活動を促すために、**青少年の意思決定プロセスへの関与**の機会をより一層増やし、自己教育システムなど**スカウティングの持つ本質的教育力を効果的に発揮できるよう**進歩制度を再構築します。その上で、スカウティングの原理、目的、方法を正しく理解し、**適切な支援を受け成長を続ける**様々な成人が、地域や社会課題の解決にアプローチするなど**地域や社会と接点を持ったプログラム**を青少年に提供します。

組織運営については、意思決定のプロセスに外部人材、若者、女性、外国人などの参画を進め、**様々な価値観**によって支えられる組織になるほか、スカウト運動を支えるために資金醸成、適切な資産管理、ICTを活用した情報伝達手段の確立などにも積極的に取り組んでいきます

また、少子化が急速に進む状況にあっても、**「より良い世界をつくる」ことに貢献し、幸福な人生を歩む青少年**を一人でも増やすために、いつからでもスカウト運動に関われる仕組みを構築します。

* 青少年とは、性別に関係なくスカウト年代の子どものことをいう

5

今後の施策の方向性

前述した「2032 ビジョン」に基づき、社会の一員としての役割を果たすとともに、それぞれの個性や持ち味を最大限に発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる「キャリア教育」（小学校は2020年、中学校は2021年、高等学校は2022年の学習指導要領の改訂で位置付けられ、近年の学校教育の大きな潮流の1つとなっている）の視点も取り入れて、次のとおり施策を展開します。

- ・スカウト一人ひとりが幸福な人生を歩むために、地域や社会、身近な仲間から必要とされることで**自己有用感**を高め、スカウトスキルとは野外活動に必要なもののみならず、**自立して生きていくために必要なもの**と位置付け、どの部門においても**地域や生活に密着したプログラム**を展開します。特にローバースカウト部門は、この運動と社会を接続する部門として捉えた施策を進めます。
- ・スカウト一人ひとりが自分の将来の姿を想像し、キャリア（＝「生き方」そのもの）のあり方を考えるきっかけを提供する試みとして、主に熟年層以上の成人が「社会課題の解決に貢献するスカウティング」の担い手として活躍する施策を展開します。さらに、これらの施策を支える様々な成人を確保し、支援するために
- ・これまでこの運動の担い手としてアプローチしてこなかった層へ積極的な掘り起こし、スカウトの保護者等向けの短期や臨時の役務の設置、必要な時に必要な人に必要な学習の場を提供するなど**A I Sポリシーの理念の具現化**を強力に推し進めます。

また、少子化が進み、出生数が下がり続ける状況にあって、

- ・2021（令和3）年度の加盟員比率が、ビーバースカウトで100人あたり0.35人、カブスカウトで0.45人であることから、依然として、この両部門での**新規加盟員を増やすポテンシャルは充分にある**と考えられます。そのために地域の青少年に体験活動を提供する取組みを一層推進する共に、中途退団を抑止するための施策、少人数隊に対応したプログラム開発など、加盟員比率を上げるための事業に全力で取組みます。
- ・それに加えて、**ボーイスカウト部門以上の青少年にもスカウティングを提供できるような施策**を推進するほか
- ・現在、文部科学省が進めている部活動の社会教育化の流れの中でのスカウティングの関わり方、県連盟に設置するローバースカウト隊のみの団、帰国子女等へ特化した団など「特色のある団」の設置の研究、実証に関する取組みを進めます。

併せて、今後のわが国の人口構造を考えた時、加盟員の大幅な増加を展望しにくい状況にあります。そのため、スカウトに良質な教育を提供するために外部資金を獲得し、**加盟登録料に依存しない財政基盤**を確立させます。



ボーイスカウト日本連盟

100年のあゆみ 新たな100年に向けての挑戦

皇太子殿下と共に

ボーイスカウト日本連盟創立60周年記念としての第8回日本ジャンボリー(1982)が終了したのちの日本連盟刊行冊子「浩宮さまと共に」の中で、(故)渡邊昭総長は「総長のことば」として、「第8回日本ジャンボリーには、浩宮殿下をお迎えすることとなり、かつスカウトと共に野営生活をなさるを思召しを賜り、関係者一同感激いたした次第であります。殿下と野営生活をともにするスカウトは広く全国各地のスカウトをと考え、各サブキャンプから1名の推薦を受け、杉原正中央審議会議員を隊長に指名して2こ班からなるスカウト隊を編成し、この隊によってサイトの整備など一切の準備が行われました」と書かれておられます。

私は巻末の「特別任務を終えて」の中で、「わずか2日間の短い期間でしたがともにキャンプ生活をさせていただきましたことは、スカウトたちにとって殿下が同世代に共に生きる若者、また博学・聡明な若い皇族、特に身近な存在として出会うことができ、本当にすばらしいことでした」と書きました。

その年(1982)年の11月7日。新宿プラザホテルでの60周年記念式典にご台臨の際、当時の皇太子妃同妃殿下に式後拝謁し、「浩宮が英国留学前にスカウトキャンプの良い経験をさせていただいたと労いのおことばを賜りました。また、当年度に始まる富士スカウト顕彰で東宮御所に参殿して皇太子殿下から激励をお受けしました。この行事は、浩宮殿下に引き継がれ、多いときには150人を超えるスカウトを小グループに分け、親しく接していただき、30分以上も予定時間を超過して東宮職の方々にご心配をおかけしたことが度々あります。スカウト一人ひとりにお声掛けいただく殿下の温かいお人柄に毎回感激しております。

また一方で日本ジャンボリーでの接伴隊(後に「梓友隊(しゅうたい)」と命名される)のメンバーが、1983年の正月3日に東宮御所にお招きを受け、懇談の機会を得ました。その折に殿下から「東宮御所でもキャンプができます」とのお話をいただき、4月9日から2日間、殿下と梓友隊メンバーによるキャンプが行われました。設営や工作物に大変興味を持たれ、設営から撤営まですべてをご一緒しました。追跡ハイク、キャンプファイア、またカブスカウトのプログラムでのゲーム「蛇の皮むき」にも参加されたことが思い起こされます。お帰りの際の「スカウトキャンプは奥深いですね」というお言葉は忘れることができません。

翌年、昭和天皇が「ボーイスカウトのキャンプに加わりしときの話 浩宮より聞きしことあり」というお歌を詠まれました。スカウト運動と皇室との深いつながりを想い、このことにご尽力くださった曾我剛東宮侍従(当時)と(故)渡邊総長に心から感謝申し上げます。

日本連盟顧問・先達
東京連盟 連盟長
梓友隊隊長
杉原 正

第8回日本ジャンボリー(1982)



第9回日本ジャンボリー(1986)



*Hello I am from America.
Let's have a fun time at the jamboree.
こんにちは!
こんにちは、Naruhito*

(機関誌SCOUTING 2019年5月号より)